

葦舟で結ぶ風景

安土は、水辺と共に歴史を築き、発展してきたまちである。しかし、近代化が進む過程において、いつしか水辺はまちから置き捨てられてしまう。本提案は、安土の水辺に再び目を向け、活動を生み出すことで、ヒト・ミズベ・マチを結ぶ。

対象地：滋賀県旧安土町



key 1. Background

信長が安土城を築いて以降、舟は主たる交通機関であり、水辺は安土のオモテであった。しかし、近代交通の発展や干拓事業に伴って、まちを取り巻く環境は様変わりする。その結果、水辺は安土のウラとなり、人々の生活から離れてしまう。



昭和 5 年頃



昭和 46 年頃

key 2. 住民へのヒアリング



昔は水が綺麗で、泳いだり田舟を漕いだりして遊んだ。あの頃の水辺を取り戻したい。



漁師が田舟で常浜と西の湖を行きかい、また多くの人々が水辺に集まり、賑わっていた。

key 3. 課題の分析

1. 安土固有の文化の衰退

まちを取り巻く環境が大きく変化の中で、田舟やヨシ、川戸に関する文化が消えつつある。



現在の常浜公園
(放置された水辺)

2. 西ノ湖の環境悪化

干拓事業に伴い湖の環境が悪化し、ヨシ業や漁業の荒廃、植生や生態系への悪影響が生じた。

3. 交流の場の減少

従来より安土の人々が水辺を介して営んだ交流は、水辺空間の喪失と共に衰退の一途をたどる。

key 4. 安土で育むべきモノは？

安土の歴史的経緯や人々の思い、まちの課題は、根底で水辺によって繋がっている。本提案では、安土の文化や環境、交流を水辺で結び、安土の「風景」に愛着を抱く仕組みを築く。



安土の風景づくり物語

誰かが言った、「ヨシで舟をつくろうよ!」と。—— 子どもも大人も安土のヨシに夢中になった。—— 湖では子どもたちが遊びまわり、親たちは舟屋に集うようになった。—— 美しい水辺の風景と住民同士の交流が戻ってきた。—— そして、その活気はまちへとひろがっていく。



01. 土壌をつくる

02. 活動を広げる

03. 活動の輪をつなぐ

01 土壌をつくるーヨシで遊び水辺を知るー



ヨシを活用した舟づくり

安土の「風景」を築くために、常浜公園で1年かけて休日にヨシ舟をつくるワークショップを開催する。ワークショップを通じて、安土の特産であるヨシを知り、水辺との関わり方を体験し、人々の集う空間である常浜公園の使い方を認知する。このワークショップは、近年その需要が低下傾向にあるヨシへ新しい使い方を示し、ヨシを積極的に利用することも狙いである。

>> ヨシ（葦）とは？

障子や簾に加工されるヨシは、水辺に生えて水環境の浄化も行う。しかし、近年は需要が少なく、ヨシの群生地域も年々減少している。



>> 常浜公園の現在

常浜公園はかつて多くの舟が行きかうまちの中心であった。しかし、人々の生活が水辺から離れ、利用されることが少ない空間となってしまった。



■ ヨシ舟づくりワークショップ

1. ヨシを刈る【知る】

ワークショップに参加した親子は、ヨシの加工業に携わる人々と共にヨシを刈る。ヨシが生息する環境を知り、ヨシと水環境を考えるきっかけをつくる。



2. ヨシを干す【まちに溶け込む】

常浜公園に舟へと加工するためのヨシを干すことで、ワークショップ参加者が訪れるようになる。また「ヨシがある風景」を公共空間に演出する。

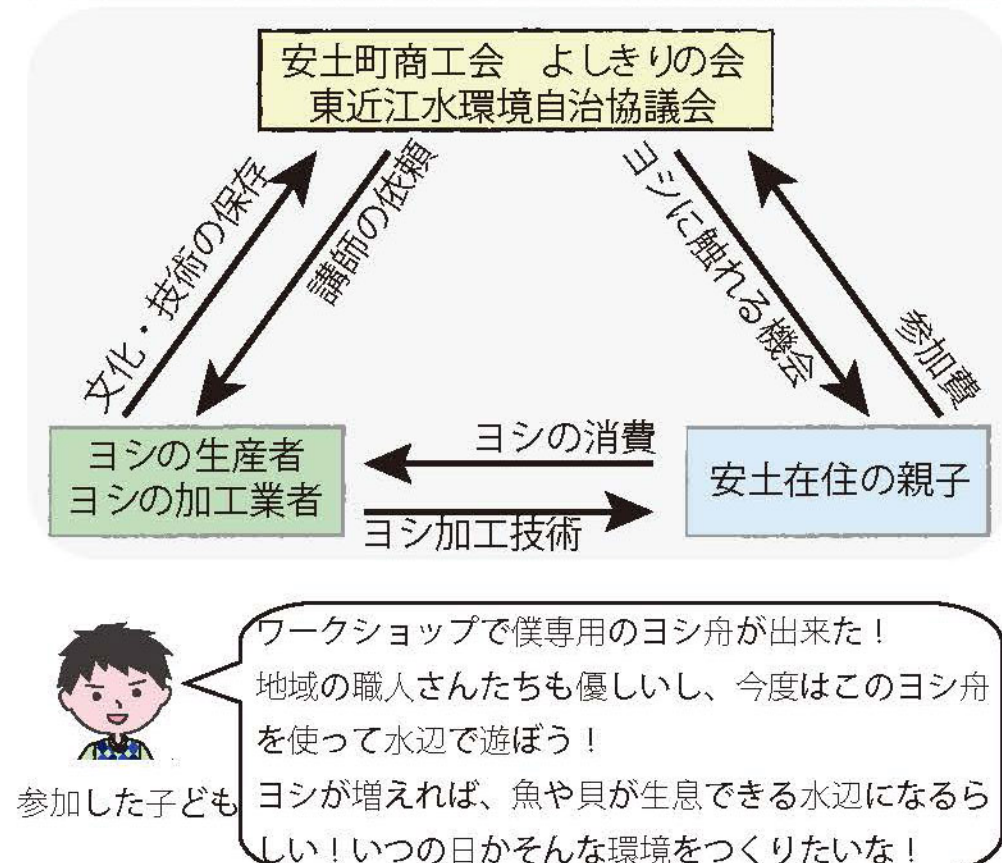


3. ヨシ舟をつくる【需要の喚起】

干したヨシを舟へと加工する。ヨシを加工する技術をワークショップ参加者を学び、この活動を毎年行うことで、定期的に多くのヨシ需要を生み出す。



■ ワークショップによって結ばれる人と水辺

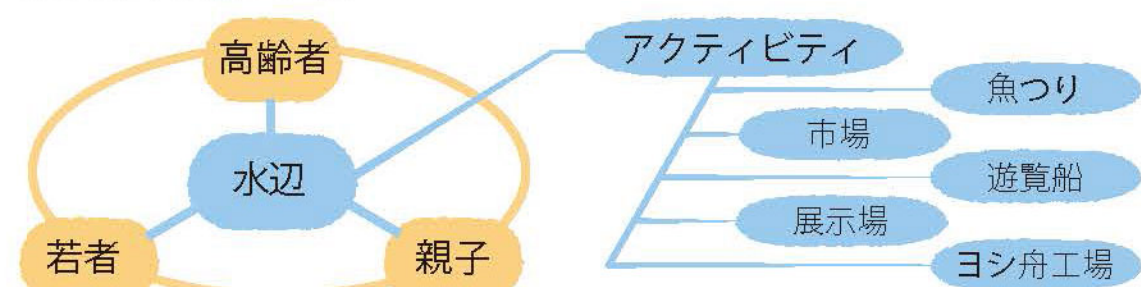


02 活動を広げるーまちと結びつき安土のオモテとなる水辺ー



ヨシ舟で水辺を軸に展開する活動を結ぶ

ワークショップで作成したヨシ舟は、安土に住まう人々の生活・生業・遊戯のツールとなる。加えて、西の湖と常浜公園の水辺に舟屋を建てて、ヨシ舟の拠点かつ安土の人々の自由なアクティビティを誘発する空間とする。様々な活動と世代内外の交流が水辺を介して生まれ、水辺が姿と役割を変えて再び安土のオモテと認識される。

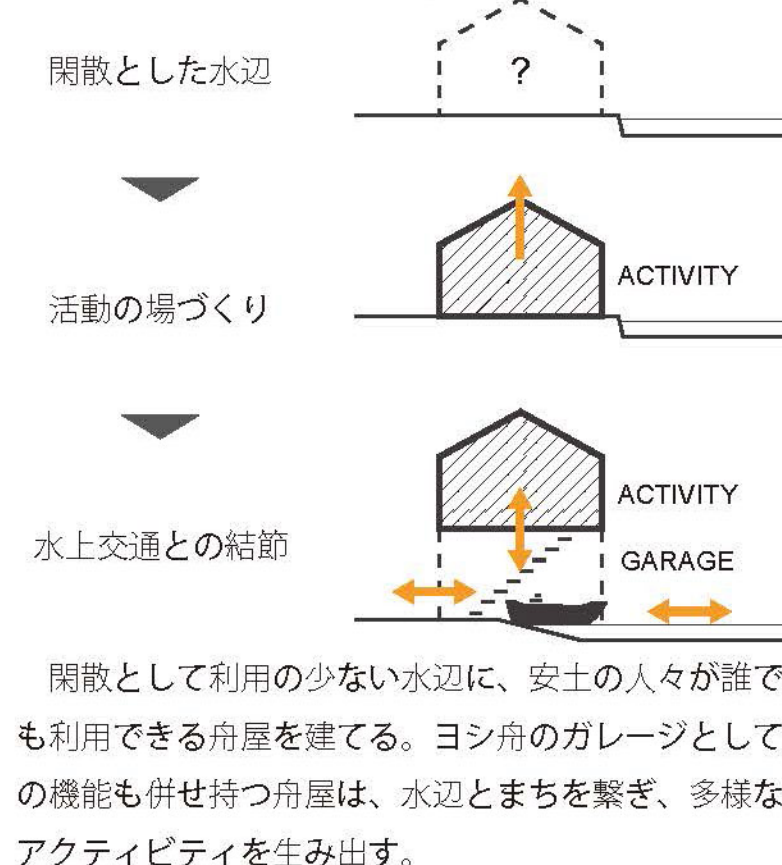


>> 西の湖ステーション周辺の現在

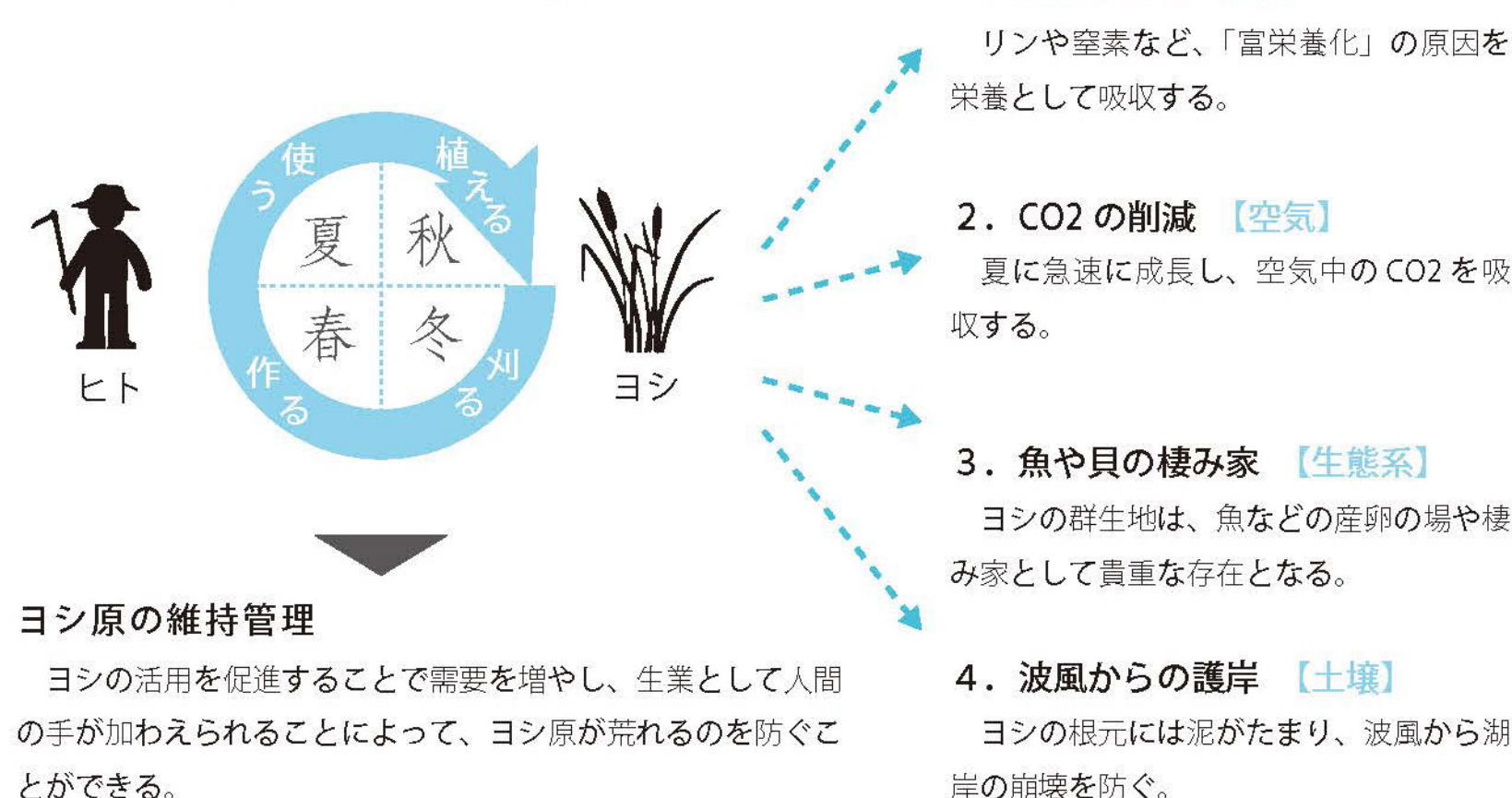
民間運営の地域コミュニティ施設である西の湖ステーション。舟着き場があり夕陽を望める湖岸とは、車道によってまちと分断されている。



■ 舟屋を生かした活動



■ ヨシの活用サイクルと環境保全



03 活動の輪をつなぐー安土と近江八幡を結ぶまちカレッジー

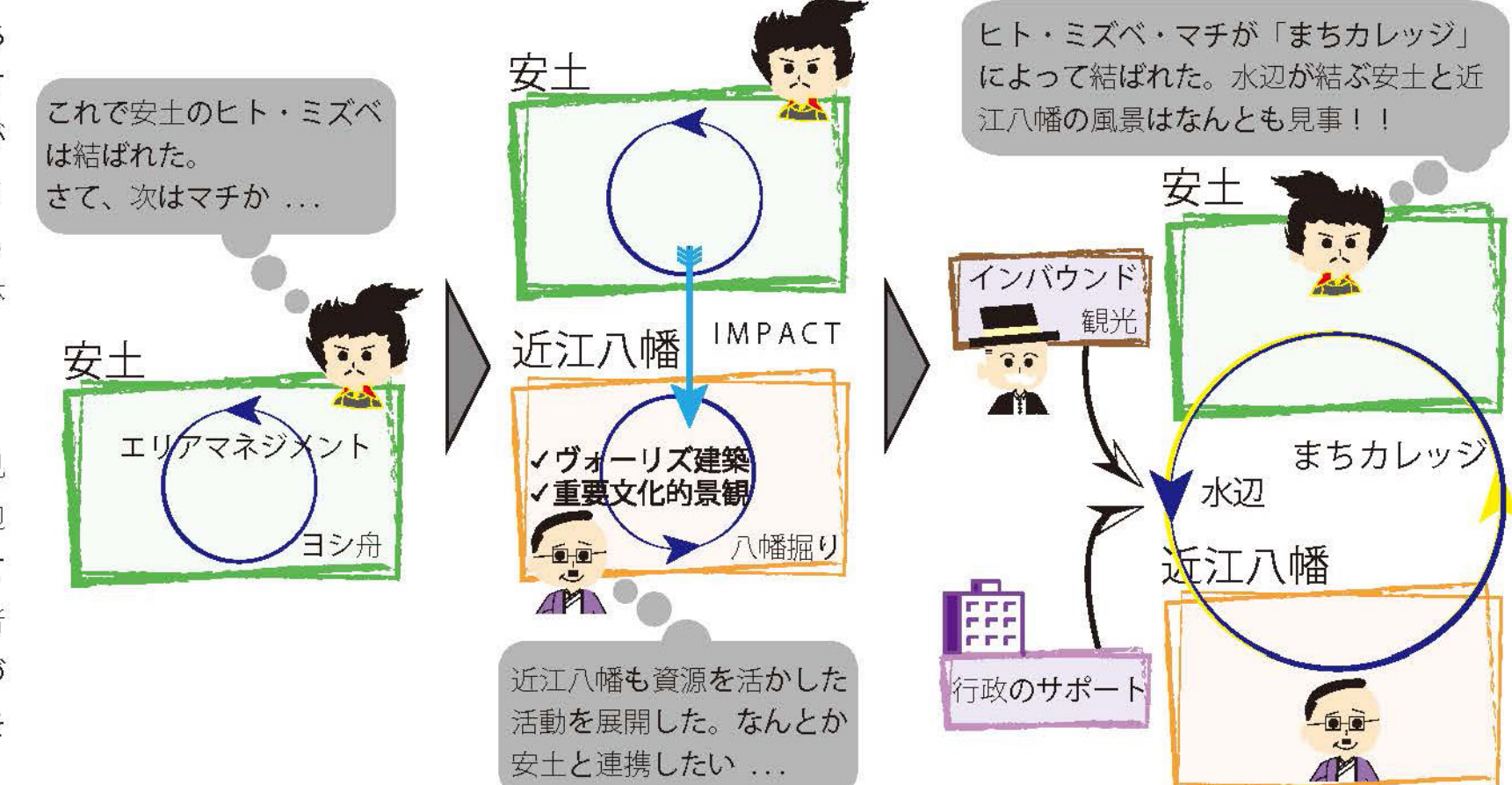
近江八幡市をつなぐ「水辺」

安土は、西ノ湖と幾多の水路を介して、重要文化的景観である「近江八幡の水郷」、隣接する近江八幡の市街地と繋がっている。市の既存計画には、水辺を活かした一体的な観光施策が求められており、次なる展開として、安土で築いたコミュニティや活動、環境保全のサイクルをもって、安土と近江八幡を繋ぐ。そうして、2つのまちが有する資源を活かした活動を市域全体へ展開させることを目指す。

まちカレッジで繋ぐ「展望」

安土と近江八幡の活動を合わせて、市全体をキャンパスに見立てた「まちカレッジ」を設立する。まちカレッジでは、水辺遊びや近江商人の哲学など、この場所固有の活動を授業として提供する。そうすることで、固有の文化を学んだ市民が継承者としての役割を担う「プロ市民」へと成長し、積極的にまちづくりに関わり、インバウンド観光の基盤として機能することを期待する。

■ まちカレッジにより結びつく安土と近江八幡





Area 01 常浜公園

親子がつながり、 地域とつながる 葦舟づくりの拠点

年間を通じたヨシ舟づくりワークショップをきっかけに、子どもと親が休日にまちの中で交流する。水辺に整備された公共空間と、ワークショップを運営するプログラムの構築によって、場所と機能が連動する。かつて港として水運の拠点であった常浜公園では、舟着き場を浜と呼んでいた。舟が行き交い、浜で人々がたむろう風景を現代に呼び起こす。同時に、近年増え続ける公園周辺の新住宅街に住む家族の地域内での孤立に対して、ワークショップの講師・受講生の関係、市場で売る・買うなど多様な関係性をもたらす空間となる。



■ 公園の周辺環境とポテンシャル



西側に広がる田園地帯



湧水地での賑わい



ザリガニ釣りスポット

トレタテ市場

公園周辺の畑で採れた農産物や、西ノ湖で獲った湖魚や貝を直売する市場。ヨシ舟で市場まで運び、またヨシ舟で他地域へ出張販売する拠点ともなる。安土の住民ならだれでも出店できるため、トモダチの出店を機に自分でも野菜を育ててみよう、ヨシ舟を作ってみようと思うきっかけとなる。



浜辺のヨシ舟工場

かつての砂浜の風景を呼び起こす空間に、新しいヨシ舟づくりの拠点としての機能が備わった場所となる。地域の高齢者を始めとする講師に教わりながら、親子での参加者が年間を通じて "MY ヨシ舟" を制作する。完成したヨシ舟は舟屋のガレージにしまい、西ノ湖へ繰り出す旅へいつでも出ていくことができる。



西ノ湖・常浜写真展

ヨシ舟を乗りつけるガレージと、市民の活動の場を一体的に設計する。吹き抜けから一階を見おろすと、西ノ湖に繋がる水面に、手づくりのヨシ舟が展示物のように停められている。



桜並木とヨシ舟遊覧船

すでに市民のシンボルとして植えられている桜並木と広場でのゲートボールなどの活動を眺めながら、ヨシ舟で常浜公園と西ノ湖を周遊する遊覧船を休日限定で渡す。





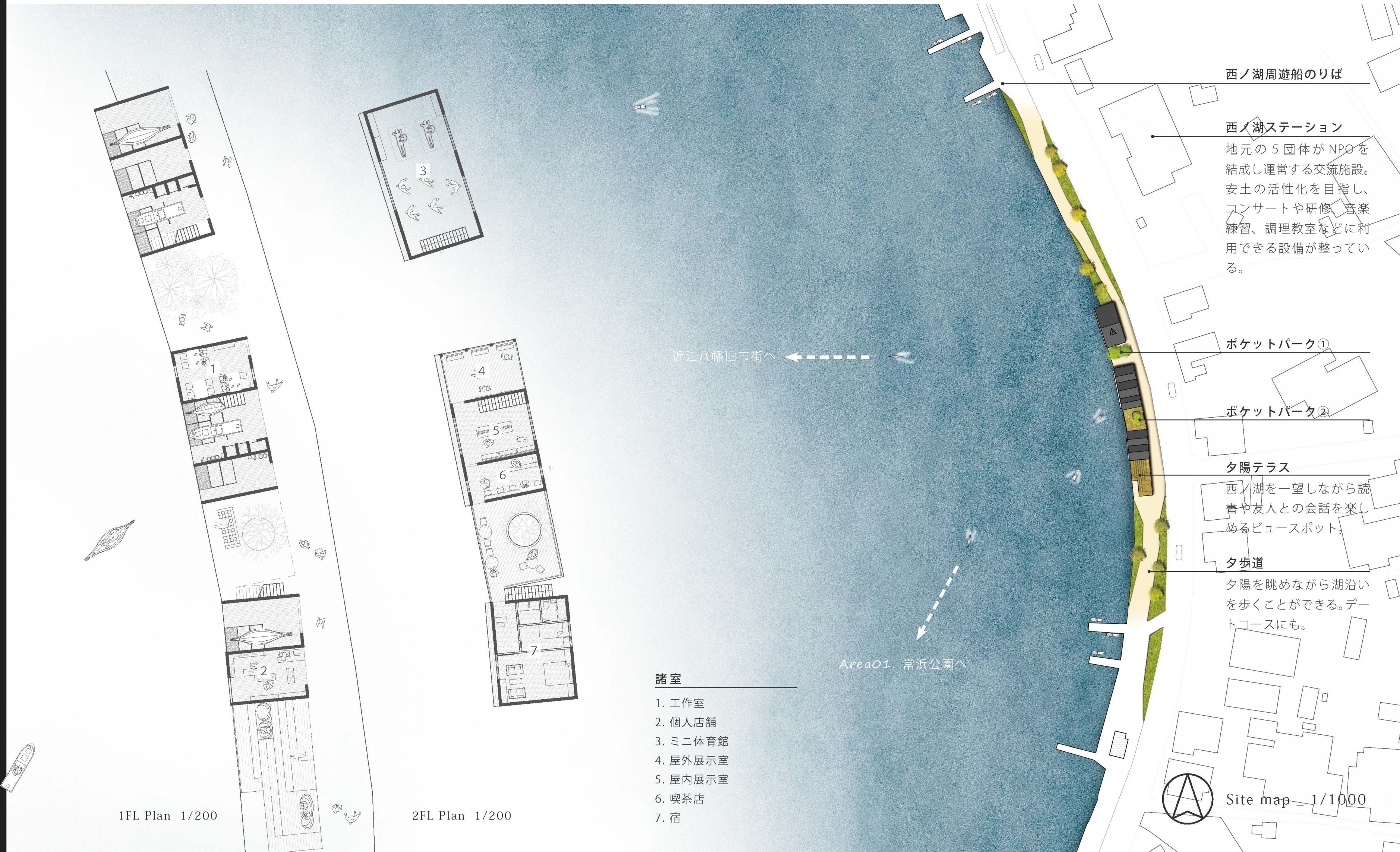
Area 02: 西ノ湖沿岸

舟屋に集まる活動 生きがい精製所

安土の市街地が唯一西ノ湖に面したエリア。遊覧船の船着き場や、まちのコミュニティ施設である西ノ湖ステーションがまとまっている。西側に湖が広がる幅 8m 程度の岸からは、対岸に沈む夕陽を望められる。ここに、公共空間に乏しい安土の湖側の顔となる、新たな拠点を整備する。様々な活動のニーズに応えられるよう、小規模で個性的な室を連ね、西ノ湖を眺めるデッキや遊歩道と一体的に設計することで、安土の新しいランドマークとなる。また、ヨシ舟で常浜公園とを人々が行き交い、水上の移動風景を生み出す。



West Elevation _ 1/150



西ノ湖周遊船のりば

西ノ湖ステーション

地元の 5 団体が NPO を結成し運営する交流施設。安土の活性化を目指し、コンサートや研修、音楽練習、調理教室などに利用できる設備が整っている。

ポケットパーク①

ポケットパーク②

夕陽テラス

西ノ湖を一望しながら読書や友人との会話を楽しめるビュースポット。

夕歩道

夕陽を眺めながら湖沿いを歩くことができる。デートコースにも。

近江八幡旧市街へ

Area01. 常浜公園へ

諸室

1. 工作室
2. 個人店舗
3. ミニ体育館
4. 屋外展示室
5. 屋内展示室
6. 喫茶店
7. 宿

1FL Plan 1/200

2FL Plan 1/200

Site map _ 1/1000